

土の帯を展開する アーグネス・フス

アーグネス・フスは、着物の帯にも見える、土を伸ばした細長い帯を用いてオブジェから器まで制作する。そのユニークな制作方法を紹介する。

太い土の帯を伸ばす。
撮影／野村知也 (p.68-71)



プレスした土の板に白・黒・グレーの化粧土を刷毛で塗る。



可塑性が高い信楽水簸土を叩いて四角にまとめる。



切り口を斜めにして、土の板を切る。



夫・若林文夫から譲り受けた銅版画プレス機に土を置く。



1枚の土の板から、何本も土の帯を切り出す。



両端に12ミリの角材を置いて土をプレスし、厚みを揃える。



数分の内に、土の帯がどんどん伸びていく。



土の帯を端からくると丸めていく。



帯の両端を手で持って、上から下に何度も落とす。初めはこれくらいの長さ。



装飾と成形が同時に完成。この後に焼成する。



最終的に、土の帯は3倍以上の長さになった。

重力を生かし、宇宙と対話する

アグネス・フスは、「作品制作において最も重要なことは帯を作ること、それは心を静めて集中するメディテーション（瞑想）のようなもの」だという。その制作の様子を見せてもらった。

まずは、粘りがあり可塑性の高い信楽水簾土（すいひ）を手で叩いて四角にまとめる。特別な土ではなく、多くの陶芸家が使う一般的な土である。

次に、土の厚みを均等にする。このような工程の場合、土の両端に同じ厚みの木の板を何枚か置き、しっぽき（切り糸）で土をスライスする。しかし、アグネスは、夫である版画家の若林文夫が以前に使っていた銅版画プレス機を使うという、非常にユニークなやり方である。しっかりと圧力がかかるので、土がより均質になるそうだ。

その板に刷毛でランダムに化粧土を塗っていく。今回は、白・黒・グレーを使い、形が強調される仕上がりになる。

化粧土が少し乾くと、ナイフで切り離す。切り口



1993年、オランダのヨーロッパセラミックワークセンター（EKWC）滞在中に初めて土の帯を作り、渦巻の作品を制作した。

を斜めにするすることで、渦巻にしたときに最後がきれいにまとまり、土の帯を足して長くする際につなぎやすくなる。

陶芸の一般的な制作工程では、練込など以外は成形後に絵付をしたり、施釉したりして色を付けるが、アグネスの場合は先に彩色する。土を伸ばすと同時に、表面にひび割れが生まれ、非常に自然な装飾となる。

土の帯の両端を手で持ち、上から作業台に何度も落とすと、あつという間に土が伸びていく。

「地球の重力を生かして土を落とすと、そのエネルギーが土に加わり、宇宙と対話しているような気分になります。大地の土と宇宙の間に、人間である私がいて生まれる表現です」

アグネスはいとも簡単に土を伸ばしていくが、1993年にオランダのヨーロッパセラミックワークセンター（EKWC）滞在中に始めて以来、30年以上にわたり続けているからこそできる技法だ。途中で切れたりせずに土を自由自在に操ることは、なかなか真似できるものではない。

あつという間に、土は最初の3倍以上の長さに伸びる。それを端からくるくると丸めていくと、小さな渦巻ができる。これを焼成すると《共生 蓋置》（15頁下）ようになる。また、折りたたむようにすると、《帯状大皿》（19頁下）のようになる。アグネスの土の帯は、無限に形を展開していく。

（本誌・田中めぐみ）



ロエベ財団クラフトプライズ2025に出品した《StopStone / TOMEISHI》は、太い帯を巻いてチューブ状にしたものを用いた。



木の成長によってひび割れる樹皮のように、土が伸びるときにできる自然のひび割れを生かす。